

外部評価実施概要

- 1. 評価日 令和2年11月
- 2. 評価方法 書面調査
- 3. 評価者 外部評価委員4名(高等教育機関の有識者1名・自治体関係者2名・産業界関係者1名)

総合評価：建学の精神・大学の基本理念、使命・目的、大学の個性・特色等を踏まえた教育・研究、地域貢献、管理運営が行われているか。

評価結果：評価基準について適切に実施している。「十分に実施している」1名、「実施している」3名

評価者総評

* 教学改革は、2014(平成26)年に策定された「南九州学園5カ年経営計画」に基づき、着実に実施検証され、進んでいると思います。しかしながら、人口の高齢化・少子化、地球、環境問題、自然災害、そして今回のコロナウイルス感染症など、外部環境の変化に翻弄され、それぞれの組織・企業が存続するために活動を続けています。今回、外部評価を行うにあたり、大学も同じだと感じました。大学とは、学びの場であり、学生にとっては、青春時代の1ページとして、将来の人生を左右する生活の場でもあります。九州には「北九州」もあれば、西も東もあり、「南九州」には世界に誇る資源がたくさんあります。「南九州」の発展のために、「南九州」の核となる、地域を代表する大学が必要です。学生の皆さんが、この大学に来てよかった。子供が生まれたら、この大学に行かせよう。そのような、大学を目指してほしいと思いました。

* 建学の精神・大学の基本理念、使命・目的を踏まえ、学生の受入れ、学修支援、教育課程など、自己点検を行いながら、さまざまな取り組みを実施している。今後も引き続き、建学の精神・開学以来の教育方針として掲げる実学教育を通して社会貢献できる人材育成を目指すとともに、本学の魅力、教育の質の向上に努めていただきたい。

* ① 「食・緑・人」という基本理念の上に大学の教学、運営の面でよく努力している。ただ、「食・緑・人」を有機的に融合させ、どのような社会を作るために努力していくのかという共通的な考え(例えばSDG's等)とその方向性の明確化が必要だと思う。それによって南九州大学の個性がより光ってくると考える。
 ② 各種の改革を学長の指導力の下で精力的に実施している。その姿勢は評価に値する。しかし、まだ完全に各改革努力が実っているとは言い難く(途上という印象を受ける)、よりスムーズに各改革事業が成果を上げる仕組みづくりが必要と考える。
 ③ 各評価基準に「改善・向上方策(将来計画)」をまとめられており、かつ改革が不完全な部分も隠さず述べられている評価報告書に好感が持てる。

外部評価員からのコメント及び大学の所見・改善策等

以下の基準項目の観点から、外部評価員からの評価及びご意見・ご提言があったものについて記載した。また、それに対する本学の所見・対策等について述べている。

項目	観 点
基準1	使命・目的等に基づき、取り組みが適切に行われているか。
基準2	学生に基づき、取り組みが適切に行われているか。(学生の受入れ/学修支援/キャリア支援/学生サービス/学修環境の整備/学生の意見・要望への対応)
基準3	教育課程に基づき、取り組みが適切に行われているか。(単位認定、卒業認定、修了認定/教育課程及び教授方法/学修成果の点検・評価)
基準4	教員・職員に基づき、取り組みが適切に行われているか。(教学マネジメントの機能性/教員の配置・職能開発等)
基準5	内部質保証に基づき、取り組みが適切に行われているか。(内部質保証の組織体制/内部質保証のための自己点検・評価/内部質保証の有効性)

基準1： 十分に実施している 2名 /実施している 2名

コメント	所見・改善策等
使命・目的及び教育目的は学則に明記され、学生便覧にも掲載されている。今後も、オープンキャンパスや教職員による高校訪問、中学・高校への模擬授業、各種団体での説明会など、あらゆる機会を通じ、本学の使命・目的及び教育目的について周知を図りながら、本学の魅力発信につなげていただきたい。	ステークホルダーに対して、これまでの直接的な対話による情報の発信に加えて、間接的な情報発信の機会を増やし、本学の教育目的・内容・魅力をアピールしていきたいと考えています。
貴学の理念標語「食・緑・人」に基づいて、「環境園芸」「健康栄養」「人間発達」のそれぞれの学部の専門的・実践的な教育目的を反映した学内運営、学外周知が実施されています。「中期5ヶ年計画」の評価、「教学改革マネジメント制度」の推進状況を踏まえて、実施効果を把握することが必要と思われます。	南九州学園「中期5ヶ年計画」、南九州大学「教学改革マネジメント制度」など、本学では経営面、及び教学面における改革を通して、南九州地域における特色ある大学づくりを推進しています。今後はこういった改革の進捗状況や、改革の成果を学内外に発信することを通して、より多くの方に本学の改革成果を発信していきたいと考えています。
① 大学全体及び各学部、学科ごとの使命・目的及び教育目的の明確化はAP、CP、DPを通じて適切になされていると考える。 ② 「国際的視野を広め」の具体化については、この評価書の全体を通してほとんど記述が見られなかった(外国人入試はあるか)。特に、留学、英語教育、外国人入学者受け入れについてより国際的な視野をもった積極的改革が必要と感じた。特に、南九州大学は造園、栄養の分野で、アジア・ヨーロッパ等の国々に対して日本文化への理解を広めることができる立ち位置にあると思うので頑張ってください。	本学では、ベトナム(ナムディン)オフィス開設し、ナムディン省、宮崎県と本学の3者による連携協定を結び、国際協力を行っています。また、海外の大学とも協定に則って研究交流、短期留学生の受け入れ、学生の海外研修等も実施しています。 今後はこういった取り組みの実態をホームページ等を活用して発信するとともに、海外大学等との協定先を拡大し、学生及び教職員の国際的視野を広めるための取り組みを進めていきたいと考えています。

基準2： 十分に実施している 1名 / 実施している 3名

コメント	所見・改善策等
<p>自己点検・評価報告書のP16に、「中途退学者、休学者及び留年生への対応策については、1～3年次前期までは学年担当教員と学生部員、3年次後期からは所属研究室担当教員と学生部員が中心となって、学生の履修状況の情報を絶えず共有して、学科長と連携してこれらの学生の指導に当たっている。」との記載がありますが、学生部員と情報共有するのは何故ですか。履修状況の情報の内容によっては個人情報に該当する懸念はないのでしょうか。また、学生によっては、履修状況について知られたくないと思う学生もいるのではないのでしょうか。そこに至るまでの事情も学生によって、さまざまであると思いますので、個々に応じたカウンセリングも含め配慮する必要があるのではないのでしょうか。 (※履修状況の情報がどの程度の内容なのか分かりかねますので、もう少し具体的に記載した方が誤解を招かないのかも知れません。)</p>	<p>学生の履修支援、及び修学支援につきましては、教職員が担当しております。さらに、大学全体の学生支援につきましては、学長から指名された教員5人(学生部長1人・次長1人・主任3人)、学科から選出された指導教員5人、学生支援課職員3人で構成した学生部が支援体制の構築及び運営を行っています。学生部を設置したことに伴い、学生の意見、情報を一元的に収集することができるとともに、担任教員との情報共有を可能とし、大学並びに学科が連携して学生の修学に関する支援・指導を行う体制を整備しています。 現在の学生支援体制により、退学・休学に至る学生や、学修状況に問題を抱えている学生への早期発見・対応が可能となっています。今後もこの体制による支援を継続的・発展的に実施し、学生の就学を支援していきたいと考えています。</p>
<p>高大連携は非常によい取り組みであり、今後も積極的に実施していただきたい。 企業巡回等都市部の施策も積極的に活用していただき、さらなる学生の就労支援及び市と大学の連携の強化を図っていただければと考えます。</p>	<p>県内の高等学校を中心に、出前授業や高校生への発展的な授業の提供など、高大連携事業を展開しています。さらには、県内企業とも連携協定を締結し、学生の就学(インターンシップ等)や県内定着に向けた就職支援を行っています。 今後の課題としては、宮崎市や都市などの自治体との連携強化を図るとともに、本学にて実施している高大連携、県内企業との連携事業のさらなる発展を図っていくと考えています。自治体や高校、企業との対話をこれまで以上に強化し、学生の就学・就職支援の充実を図っていきたくと考えています。</p>
<p>少子化に対応した、学生の受け入れを更に進めていく必要があります。 「学びなおし・働きながら学べる」など、社会人の受け入れ環境整備も必要ではないでしょうか。 将来の目標を持って、貴学で学びたいという人にどのようにして伝えるのか。更なる「高大連携」、「産学連携」の推進が必要と思われます。 貴学の特色、学部・学科の特徴をさらに積極的に発信してください。</p>	<p>現在、社会人入試(社会人経験者向けの入試区分)は実施していますが、働きながら学びたいという人を対象としたカリキュラムは設定していません。今後、18歳人口が減少していく状況を踏まえ、社会人受け入れ、生涯学習教育への環境整備は必須といえます。 県内社会人、及び企業の実態把握を行い、本学の特徴を生かした「学び直し」プログラムの取り組みを検討し、推進していきたいと考えています。</p>
<p>① 学生の受け入れについては幅広い入試枠を設けている。ただ、学科の充足率については7～8割前後の所もあり、定員の見直しあるいは入試努力が必要と思われる。大学院については、より魅力的な進路を示せるような教育、進路対策が必要である。 ② 学習支援については、「②ティーチングアシスタント(TA)等の活用」について自己評価が抜けている。また評価書にはどのくらいのTAを毎年採用しているかなどの具体的な数値が必要である。 ③ キャリア支援については、各教育課程内での発展がみられる。ただ、キャリア支援・指導についての系統性を整備する必要がある。各種、技能検定に向けての講座、指導は大変良い、他の大学では見られない特徴である。 ④ 学生サービスについては、障がい者に対する支援などよくやっている。また、南九州学園奨学金制度は国・公立大学には見られない事業である。 ⑤ 学習環境の整備については、各付属施設の整備、情報サービスが進んでいる。授業を行う学生数の適切な管理については、具体的な資料がないので、評価のしようがない。 ⑥ 学生の意見・要望への対応については、一般的な大学の事業レベルと考える。評価書では各学生の要望についてどのように対応して来たかの事例など記載すべきである。</p>	<p>①学生の受け入れにつきましては、大学及び学園の最重要課題として位置づけ、学園内に学生募集会議を設置するなど、入試広報等の見直しを行っています。また、過去の入学者の実態を量的データ、質的データの両面から分析し、学生募集戦略を企画し実施し始めたところです。また、大学院につきましては、現役学生からの進学に加えて、社会人の学び直しの場として機能するよう、今後検討を行う予定にしています。こういった取り組みと同時進行で、本学の教育面における魅力の発信も強化していきたいと考えています。 ②④TAにつきましては、大学院生の学生数が少ないこともあり、限られた科目・人数を活用しております。一方で、本学ではSA(スチューデント・アシスタント)制度を全学に導入し、上級学年の学生が授業補助、並びに学生の修学支援を行い、学習支援の充実を図っています。今後も、SA制度を活用し、障害がある学生の支援を含む学習支援の充実を図っていきたくと考えています。 ③教育課程内外において、卒業後のキャリア形成に向けた各種資格取得支援や、勤労観等の育成を目指した科目配置などを行っています。今後も、少人数によるきめ細やかな支援体制を継続・発展させ、学生のキャリア形成支援の充実を図っていきたくと考えています。 ⑤授業を行う学生数の適切な管理につきましては、大学としての基準・水準を順守するとともに、各教科の教育内容・方法等を踏まえたクラス編成(学生数)を行っています。今後も、授業を受ける学生数によるクラス編成ではなく、科目の教育特性を踏まえたクラス編成を行っていきたくと考えています。 ⑥学生の意見・要望への対応につきましては、個別の学生の状況を踏まえて対応しています。特に低学年時に多い就学に関する悩み、友人関係による悩みなどにつきましては、カウンセラーと学科の担当教員が情報共有を行い、学生に寄り添った学生支援を行っています。今後は、学内での学生支援の実態(相談から対応、対応の結果等)を取りまとめ、教職員で共有できる体制を構築していきたいと考えています。</p>

基準3: 十分に実施している 1名 / 実施している 3名

コメント	所見・改善策等
<p>教員配置計画に基づき教員数の確保を行うとともに、教員の資質向上を図るため、継続して、学生による授業アンケートや教員相互による授業参観、新入生魅力度調査・卒業生満足度調査及びFD講演会の実施に取り組んでいただきたい</p>	<p>学生の学修実態やキャンパスライフについて点検・評価するために、各種調査を定期的・継続的に実施しています。調査結果は各担当が取りまとめ、教授会等を通して教職員に報告しています。また、授業科目担当教員が自己評価を行う際のひとつの目安として活用できるよう、授業評価や教員相互による授業参観を実施しています。</p>
<p>1年生対象の「新入生魅力度調査」、4年生対象の「卒業予定者満足度調査」、「学修状況に関する調査」の検証・評価を行い、評価結果をどう品質管理に反映するかということが、貴学の価値を高める最善の方法だと思います。</p>	<p>今後は各種調査結果を実施・結果の公表から、結果を踏まえた改善がどのように行われているのか、という点を重視し、教職員の教育力向上や、魅力ある大学づくりを推進していきたいと考えています。</p>
<p>① 3ポリシーをすべて整備し、それを学生への指導、授業方針に取り入れるという努力をしている点、大いに評価できる。ただ、特にDPをどのように系統的に授業カリキュラムに反映させているか(すなわちカリキュラムマップ、ナンバリング等)への明示化が進んでいない気がする。ポリシーは各授業でその実現が担保されなければならない。最後の詰めがDPの授業への反映であると考ええる。 ② GPA,CAPなど設定は、すでに各大学の教学の基本的整備事項である。今後は、それらの習得過程をどのように学生に認識させるかについての学生への見える化が重要となるが、その部分がこの評価書では見えない。 ③ 大学院については、最近の文科省のチェックは、修士号授与の認定基準(すなわち専攻ごとに授業と研究成果)の学生への公表・提示、及びそれを恒常的に指導教員と学生とが共有できているかが問われる。この評価書を見る限りではその所が明確ではない。 ④ 授業評価アンケート(FDの項も含めて)の実施はあるが、最近は、その結果を授業毎に公表し、かつ評価結果を教員がどのように改善に結び付けているかが問われる。この評価書だけからは、その部分が見えない。</p>	<p>①DP(ディプロマ・ポリシー)を踏まえたカリキュラム編成、並びに科目の位置づけの明確化につきましては、現在、教務委員会を中心に取り組んでいるところです。学生に対しては、2019年度から学科専門教育に関する履修系統図(カリキュラムマップ)を入学時・オリエンテーション時に配布し、履修計画の参考にするよう指導しています。今後は、教務委員会等で進めているDPを踏まえた学科及び教養教育のカリキュラム編成(CP)、そして科目の位置づけの明確化を早期に行い、学生が先を見通した学びが展開できる体制を整備していきたいと考えています。 ②学修成果の可視化につきましては、2020年度にアセスメント・ポリシーを制定し、点検・評価体制を構築したところです。今後はこのアセスメント・ポリシーに基づいた学修成果の可視化に向けて、ディプロマサブリメントの導入などを計画し検討を進めているところです。 ③大学院生の指導体制の整備につきましては、在学生が少ないということもあり、指導教員と学生とがしっかりと情報共有ができてきている状態です。今後は、学生数の増加を踏まえて、全学的な指導体制の方針と実施方法についての仕組みを構築していきたいと考えています。 ④授業評価アンケートの結果については、現在、結果を踏まえた改善の成果を点検・評価する仕組みをFD委員会を中心に検討中です。今後はこの仕組みを早期に構築し、調査結果の配布から、調査結果を踏まえた改善及び授業実践の点検・評価体制を構築していきたいと考えています。</p>

基準4: 十分に実施している 3名 / 実施している 1名

コメント	所見・改善策等
<p>適切な教学マネジメント体制が構築されています。</p>	<p>教学マネジメント体制につきましては、2020年度、従来に比べてより教育の質保証を重視した体制に再整備したところです。さらに、点検・評価体制の充実に向けて、アセスメント・ポリシーを策定し、学内の各種調査の整理・統合を図っているところです。今後はこの新たな体制にて教学改革を推進していくとともに、学修成果の可視化(学生の学びの伸長)を学生はもちろんのこと、学外にも発信していきたいと考えています。</p>
<p>① 学長のリーダーシップの下、各種改革が精力的に行われ、かつ大学改革に向けての道筋が明確につけられている。 ② 問題はPDCAのC→Aが具体的にどのように具現化されているかである。それについてはわずかの記述のみみられるだけであるが、最も重要なのはその部分なので、より具体性の追求及び広がりを持たせることが必要と考える。</p>	<p>②教学改革におけるC(点検・評価)からA(改善)につきましては、学長を長とした教学改革会議にて、毎月の教学改革関連委員会等の動向を確認するとともに、半期毎の事業報告を基に次の半期に対する学長からの指示書を提示するようにしています。教学改革関連委員会による自己点検、教学改革会議による点検・評価、同会議による改善指示、同委員会による改善報告などを繰り返すことにより、教学改革の継続的な発展を目指しています。</p>

基準5: 十分に実施している 2名 / 実施している 2名

コメント	所見・改善策等
<p>内部質保証のための組織整備を図り、自主的・自律的な自己点検や評価を行うとともに、経営戦略室において、IRを活用した調査・データの収集と分析を実施している。経営的観点及び教学的観点から分析を精査するための人員体制等の課題はあるが、今後も引き続き自主的・自律的な自己点検・評価を継続しながら内部質保証に関するPDCAサイクルの定着に努めていただきたい。</p>	<p>2020年度、内部質保証に向けて、教学マネジメント体制を再整備し、学長を長とした教学改革会議を設置したところです。また、教学改革関連委員会についても、既存の規程を見直し、教学改革における各種委員会の役割を明確にしたところです。</p>
<p>各取り組みについてPDCAをしっかりと機能させ、自己評価にあるとおり、スピード感をもって会費うに取り組むとともに、大学の独自性をしっかりと発揮していただきたいと考えます。</p>	<p>また、内部質保証の点検・評価体制としては、アセスメント・ポリシーを策定するとともに、これまで体系的ではなかった各種アンケート調査を体系的かつ連続性のあるものに位置付け、教学マネジメントサイクルが効果的に機能するようにしています。さらに、2020年度、学園にIR委員会を設置し、教学改革の進捗管理や企画・運営支援体制を強化しています。</p>
<p>IR専任教員を採用するなど、大学としての教学改革の意思がよく見える。各種調査アンケートによるデータの収集はどの大学でも盛んに行われるが、それらを統合して大学の管理・運営に生かし切っているという事例はなかなかない。今後の進展を期待する。</p>	<p>今後はこの内部質保証を含む教学改革の推進に向けて、スピード感をもって取り組めるよう、人員の配置を含めた体制の見直しと、教学関連委員会や各学科等の役割・機能を明確化し実行していくことが課題と考えています。</p>
<p>内部質保証の組織体制は整備されています。しかしながら、自己点検・評価に基づいた改善が円滑に行われていないとする自己評価の記述がありました。貴学の目標実現には、通常業務と定期的な自己点検・評価、並びに外部評価に基づいて、教学改革を継続することではないかと思われます。</p>	